

林羅山の『大学』解釈をめぐつて

——『大學諺解』と『大學和字抄』の比較検討を通して見た林羅山の朱子学——

武田 祐樹

1 はじめに

一七世紀初頭における朱子学の盛行と、これに対する林羅山の寄与という問題を、正面から論じた研究は稀である。また、論じるとしてもそれは儒学史や漢文学史における一ページとして、伊藤仁斎や荻生徂徠の前史的に扱うに過ぎず、具体的な検討や跡づけに欠けるものが大半である。

たとえば西村天囚は、林羅山が一旦は建仁寺を出奔しつつも、後に剃髪して徳川家康に仕えたことを儒教による仏教からの独立として評価し、また林羅山が朱子学を奉ずる立場を取ったことを根拠にして一七世紀における朱子学の盛行・官学化というストーリーを描く。^①

しかし、こうした語り方を批判する者もいた。例えば、津田左右吉である。津田は、「儒教が多少の感化を所謂学問をした諸大名の民政に及ぼした」ことは認めている。しかし、朱子学はそもそも外来思想であって、その盛行はあくまでも上級武士にのみ見られる現象に過ぎず、社会全般に広く行き渡っていたわけではないと主張した。^②

丸山真男は津田の批判を承知しつつも、林羅山や彼の朱子学が幕藩体制を肯定するイデオロギーとしての意味を持ったこ

とを論じた。⁽³⁾しかし、丸山の論が尾藤正英により批判され、寛政異学の禁の教育制度史上の意義が注目される中で、一七世紀における朱子学の盛行や林羅山の寄与といった問題は等閑視されるに至った。⁽⁴⁾

しかし、津田や尾藤の批判を認めた上でも、まだ残る問題がある。それは一七世紀において、徳川将軍家とそれを取り巻く諸大名が学者を雇い、古典の講義や注釈、あるいは各種編纂物の作成を行わせたという事実を、歴史的にどう位置づけるかという問題である。

本稿では、幕藩体制維持のためのイデオロギーであるとか、広く社会全般に行き渡ったかどうかという問題は一端棚上げする。むしろ、最もラディカルな批判者である津田も認めた儒教の為政者への感化という問題について、古典注釈という側面から考えたい。

本稿は、林羅山の朱子学が備える学術上の特色を、『大学』解釈という点から論じ、これを通じて一七世紀の前半において、朱子学が為政者にとって意味を持つ学術であったことを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、林羅山の著述である『大學諺解』と『大學和字抄』に着目し、両書の成立経緯に配慮しつつ比較検討するという方法をとる。

『大學諺解』に関しては、村上雅孝の論考⁽⁵⁾が存在する。村上は、国語学の立場から、慶安三年版『四書集注抄』と『大學諺解』の訓点を比較検討した。これにより所謂道春点から、林羅山自身の意向がより明確に示されているものと期待される、羅山点への遡及を試みたのが村上氏の論考である。村上は『四書集注抄』を用いたが、本稿では出版に至る経緯の不明瞭な同書を扱うことを避けたい。

この後に現れたのが大島晃の論考⁽⁶⁾である。大島は『大學諺解』を単独で扱う。大島は、『大學諺解』の分析を通して、林羅山が舶載される書物をいかに咀嚼し、自身の理解をいかに示したのかを論じた。大島は、無秩序に舶載される書物をふんだんに用いた林羅山の朱子学理解が示される『大學諺解』に、林羅山の博学ぶりやその読書の有する自由さを見て取る。

明治以来の林羅山研究の通弊は、林羅山がその学識を利用して何を成したのかに對する具体的な検討を欠くことにある。

それは為政者に奉仕することである。多くの者が認める通り、林羅山は御用学者であるに違いない。しかし、問題はまさにその為政者へ奉仕するための学問の内実に対する具体的な研究を欠くことにある。

前稿^⑧では林羅山の学術が備える特質を、清原家への強烈な意識のもとに形成された、四書を新注によって読むという態度にあると指摘した。本稿では、右の理解の下、さらに林羅山の学術に対する考察を進めたい。そのために、『大學諺解』と『大學和字抄』が備える性格の違いを、両書の成立経緯や成立時における林羅山の状況への理解の下に、明らかにしたい。さらに、両書の性格の違いを生んだ林羅山という人物の『大学』解釈が持つ二面性について論じる。最後に、林羅山の朱子学が備える学術上の特色を明らかにする。以上を通じて、一七世紀の前半において、朱子学が為政者にとって意味を持つ存在であったことを論じる。

2 『大學諺解』と『大學和字抄』

本節では、『大學諺解』と『大學和字抄』の書誌情報を紹介する。

『大學諺解』は三冊から成り、漢字カタカナ交じり文で記された写本である。国立公文書館内閣文庫に所蔵される^⑨。表紙を除き上冊が八一丁、中冊が七七丁、下冊が八八丁、毎半葉一〇行。「大学章句序」「大学 朱熹章句」によって構成され、朱熹の「大学章句序」及び「大学章句」に対する林羅山の解説が附された注釈書であることがわかる。表題は「大學諺解」下冊「大学 朱熹章句」末尾に「大学章句解 終」とある。なお、序題「大学章句序」の下には「林羅山道春解」とある。下冊末尾には跋が附される。この跋は『羅山文集』巻第五に「大學解跋」として収録される。「編著書目」には「大學解 二卷」の名が、「論語解 四卷」「中庸解 三卷」と共に見える。後に林鷺峯が著した『大學或問私考』においては、「諺解」「文敏先生諺解」としてしばしば引用される。また「大學或問私考序」には「章句諺解」の名が見える。本稿では、便

宜的に『大學諺解』という呼称を用いる。

『大學諺解』は、林羅山の著述の中でも、特徴的な成立経緯を持つ。後述する通り、林羅山の著作は基本的に徳川将軍家や徳川幕府高官ないしは各大名へ献上するために書かれたものがほとんどであるが、この『大學諺解』はそれらとは成立事情を全く異にする。

以下、『大學諺解』の跋をたよりとしつつ、その成立の経緯を窺いたい。

予長子叔勝、幼讀書、粗曉字義、且搜事跡。況又慕聖賢之道乎。去夏俄物故。吁天喪我者歟。哀慟不止。纔未至於喪明而已。

予が長子叔勝、幼にして書を読み、粗ぼ字義を曉り、且つ事蹟を搜る。況んや又聖賢の道を慕ふをや。去夏俄に物故す。吁、天は我を喪ぼす者か。哀慟止まず。纔かに未だ明を喪ふに至らざるのみ。（『大學諺解』¹⁰跋）

『大學諺解』の成立は、林羅山の長子林左門の死を契機とする。林羅山には四人の息子がおり、林羅山はとりわけ長子である林左門の将来に期待を寄せていた。¹¹ところが、この林左門が夭折した。林羅山は激しい悲しみを経験する。「喪明」とは、孔子の弟子の子夏が息子を亡くして悲しみの余り失明した故事を踏まえる。¹²

これに先だち慶長一二年に西笑承兌が没した。同一七年には三要元佶、同一九年には清原秀賢が相次いで没する。青年期のライバルは次々と姿を消し、残すは吉田梵舜と以心崇伝のみであった。

寛永元年、林羅山は徳川家光という若い君主に近侍することとなる。この徳川家光の下で、林羅山は多くの規模の大きな仕事を達成して行く。林羅山の前途は開けつつあった。このような状況において、林左門が没したのである。

林左門の没後、林羅山は京都に留まる。半年ほどの滞在期間中に林羅山が林鷲峯・林讀耕斎の兄弟へ行った激励につい

て、林鷺峯は様々な形で書き残している⁽¹³⁾。林羅山は新たな後継者を育てなければならなかったのである。

若使叔勝在、則無由作大學解。叔勝既會得了也。今作之者、它日爲授幼子也。

若し叔勝を使て在らしむれば、則ち大學解を作るに由無し。叔勝既に會し得了るなれば、今之を作るは、它日幼子に授けんが爲なり。（『大學諺解』跋）

林鷺峯の学習階梯を「自叙譜略」⁽¹⁴⁾から窺うと、寛永六年を境に大きく様子が変わったことがわかる。一三歳になるまで林羅山と林左門の講義に陪席する程度であったが、その後は次々に古典籍を読み進め、八年後の寛永一五年には『三体詩』を講じるまでに至る。つまり、長子林左門の死を承け、従前は熱心に教育を施されていなかった三男林鷺峯の育成が、林羅山の急務となったのである。

鷺峯の学習階梯のなかで、いつ『大學諺解』は読まれたのであろうか。寛永九年、林鷺峯は四書五經を始めとして、『聯珠詩格』『瀛奎律髓』『唐詩選』『古文真宝』などの漢籍を読破する。この時のことを、後に林鷺峯は「見先考所作大學諺解、而讀論孟中庸大全」⁽¹⁵⁾と述べる。林鷺峯は、『大学』以外の四書については『四書大全』を用いたが、『大学』だけは『大學諺解』を用いる。林鷺峯は『四書大全』の『大学』の箇所を『大學諺解』で補い、他の四書に先駆けて読んだのである。『大學諺解』の『大学』理解は、林鷺峯の『大学』以下の四書の読み方を左右したに違いない。

此諺解、本章句并或問、尊程朱也。考以鄭註孔疏陸音、尋舊也。輔翼以大全通考通義 大成蒙引、釋章句也。參之以知新日録林子四書標摘管志道釋文楊李四書眼評、備異記也。其間加己意而述其義、非敢擬議之。

此の諺解、章句並びに或問に本づくは、程朱を尊べばなり。考するに鄭註・孔疏・陸音を以てするは、舊を尋ぬるな

り。輔翼するに大全・通考・通義大成・蒙引を以てするは、章句を釋するなり。之に參ふるに知新日録・林子が四書標摘・管志道が釋文・楊李が四書眼評を以てするは、異記に備ふるなり。其の間己が意を加へて其の義を述ぶは、敢えて之を擬議するに非ず。（『大學諺解』跋）

一七世紀初頭という時期において、清原家では、学庸は新注で読み、論孟は古注で読んでいた。また、藤原惺窩は『逐鹿評』において『礼記』所収の「大学」篇の本文を用いて『大学』を解説する。彼らは皆、新たな学術界の動向に対応しようとしていた。彼らは宋代から明代にかけての中国の学術を整理し、従来の知識の中に位置付け、理解しようとした。

日本ニテ清原外記頼業、始テ大學中庸ヲ拔出シテヨメリ。時代ヲ考ユレハ、朱子ノ時ニ當レリト、彼家ニ云ヒノ、シルハ、尤イフカシキ事也。朱子ノ註本、渡リテ後、五山文字ノ僧、ヤウクスコシキヨミテ、其後彼家ニモ、ヲノレカ眼力ノ及所ヲ抄出シ、近註ト號シテ、常忠宣賢カ徒、ヲロソカニ見侍リス。全文ヲハエヨマス予弱冠時、京師家塾ニテ、四書集註章句ヲ講ス。笈ヲ負テ、耳ヲ傾ル者、多群集ス。人皆古註ヲヨミテ、程朱ノ名ヲサヘ不知之。今三十年後、闔國悉ク予カ家風ヲ称ストナン。（『大學諺解』）

林羅山は清原家に学びつつも、自分なりの四書に対する接し方を導き出した。それを子孫へ伝えようとして、『大學諺解』は著されたのである。

次に、『大学和字抄』の紹介を行う。なお、紹介するにあたり、福井保氏の業績を参考にする。⁽¹⁶⁾

『大學和字抄』は一冊の写本であり、漢字ひらがな交じり文によって記される。テキストとしては肥前島原図書館松平文庫に伝わる写本のみであり、他の伝本の存在は確認されていない。表紙を除き五三丁、毎半葉一一行。表題が「大學和字

抄」である。内題として「大學」の二字が掲げられ、「子程子曰」に始まる朱熹の小引、「大学之道在明明徳」に始まる経、「康誥曰」に始まる伝と続き、それぞれについて林羅山の解説が附される。本文の作りと全体の構成から、基本的に『大学章句』に依拠した注釈書であることが窺える。第五〇丁には林羅山と林鷺峯の跋が附されており、林羅山による跋は「大學倭字解跋」として『羅山文集』巻第五に収録されている。

両者の跋から『大學和字抄』成立の経緯を窺いたい。

正保二年二月十五日、奉 鈞命撰大學倭字抄。至同廿四日抄之了、別清書之、三月十五日献之。羅山子道春
正保二年二月十五日、鈞命を奉り、大學倭字抄を撰す。同廿四日に至り、之を抄し了り、別に之を清書し、三月十五日之を献る。羅山子道春

此一冊、以正保二年三月十五日、所献 幕下之藁繕寫之、塞阿部豊牧之請也。即是所遣豊牧之草本也。 慶安四年辛卯七月下旬 向陽子

此一冊、正保二年三月十五日、幕下に献する所の藁を以て之を繕寫し、阿部豊牧の請を塞ぐ。即ち是れ豊牧に遣す所の草本なり。 慶安四年辛卯七月下旬 向陽子（『大學和字抄』¹⁷）

右の跋と「羅山年譜」および「羅山行状」から、『大學和字抄』は三度にわたって徳川將軍家に献上されたことがわかる。寛永三年に『孫子諺解』や『三略諺解』とともに献上されたもの、正保二年に『老子抄』とともに献上されたもの、慶安四年に『貞觀政要諺解』とともに献上されたものである。肥前島原図書館松平文庫所蔵の『大學和字抄』は、三度目に献上された『大學和字抄』の草稿を写したものであろう。

『大學諺解』が後継者の養成という特異な事情から著されたに對して、『大學和字抄』は、林羅山の著した注釈書としては、オーソドックスな為政者向けの著述のように見える。しかし、実はそうではない。

そもそも、林羅山が著した注釈書のうち、漢字ひらがな交じり文のくずし字で記された物は稀である。また、ある一つの古典について、三度も同じタイトルで注釈を附して献上されることは異例である。さらに、時期としても林羅山が徳川家光に近侍することになってまもない頃（寛永三年）、徳川家綱が元服する直前（正保二年）、同じく徳川家綱が征夷大將軍に任ぜられる直前（慶安四年）に献上されている⁽¹⁸⁾。これは、『大學和字抄』が林羅山と徳川幕府の双方にとって重要な意義を持っていたことを示す。

『大學和字抄』は、徳川將軍家の披閱に供するために漢字ひらがな交じり文で記されている。この点も、自身の後継者のために漢字カタカナ交じり文で記された『大學諺解』と、好対照をなす。

林羅山の社会的な立場という点から観ても、『大學和字抄』は『大學諺解』と対照的である。寛永七年の段階では、林羅山は吉田梵舜や以心崇伝といった往年のライバルが周囲にあり、自身は後継者問題を抱えていた。また、当時の林羅山は『寛永諸家系図伝』や『本朝神社考』などの規模の大きな編纂物をまだ著していなかった。しかし、正保・慶安年間ともなると、第三子林鷺峯は成長して林羅山をサポートするに至る。三度目の『大學和字抄』献上の際、阿部忠秋が仕事を林鷺峯へ依頼したことも偶然ではあるまい。林羅山は、慶安元年版の『延喜式』出版に際して中原家や清原家から協力を要請され⁽¹⁹⁾、元号の制定にも関わることとなる⁽²⁰⁾。

このように『大學和字抄』は、著作時の林羅山の社会的地位という点でも、『大學諺解』とは事情を異にするのである。

3 伝と章句の掲出法

本節からは、『大學和字抄』と『大學諺解』に見える注釈態度の比較検討を行い、林羅山がいかなる材料に拠って『大学』を解釈するのかを窺う。本節と次節では、朱熹『大学章句』伝三章第一節に対応する箇所に着目したい。

『大学章句』伝三章では、三綱領の一つである「止至善」が問題となる。第一節では、『詩経』商頌「玄鳥」篇から詩句が引用され、人には止まるべきところがあることを説く。⁽²¹⁾この第一節を承け、人は止まるところを知らなければならぬと説く第二節と、何に如何にして止まるのかを説く第三節が続く。引用される詩句と『大学』における詩句の利用法に対する理解の双方が問われる箇所である。

まずは、本文の掲げ方を見る。

詩云、邦・畿千・里、惟民所_レ止_ル

詩商頌玄鳥之篇。邦・畿、王・者之都也。止、居也。言物各有_二所_レ當_キ止之處_一也（『大学諺解』）

詩云邦畿千里惟民所止（『大學和字抄』）

「・」は音符号を表す。『大學諺解』は、『大学』の伝とともに、朱熹による章句をも掲げている。また、句読点と訓点も加えられている。これに対して、『大學和字抄』は伝の本文のみを全くの白文で掲げている。

『大學諺解』の伝と章句を共に掲げて加点する姿勢と、『大學和字抄』の伝のみを示して全く加点しない姿勢は、いずれも林羅山が著した注釈書のなかでも特徴的である。

『大學諺解』と同様に、自らの子孫へ向けた著作である『論語諺解』でさえ、『論語』本文を掲げるのみである。『論語諺解』における『論語』本文は加点されているが、朱熹による注が示されることはない。⁽²³⁾

一方、『大學和字抄』と同様に、徳川将軍家へ献上された注釈書としては『三略諺解』がある。この『三略諺解』も、参考にした『七書講義』の注を掲げこそしないが、『三略』本文は加点されている。⁽²⁴⁾

『大學諺解』と『大學和字抄』は、伝と章句の掲げ方に限っても、異なる態度を示す。『大學諺解』が加点されているのは、読者に『大学』を、朱熹による章句も含めて、丁寧を読むことを要求するからである。一方で、『大學和字抄』の伝のみを無点で掲げるのは、読者に伝や章句を直に読むことを要求しないからである。『大學和字抄』において、読者は林羅山による解説を読めば、無点で記された漢文の内容を理解できたことになる。

4 明代の諸書をも含めた新注に拠る解釈

次に、林羅山による注釈部分の検討に移る。前節同様に、伝三章第一節を扱う。「止」字の解釈に着目する。

止ハ、居也トハ、居住ノ義也。都ハ、皇居ニテ、天下ノマン中ナレハ、四方ノ人アツマリ向テ、コ、ニ止ラント欲スルヲ、至善ノ地ニ止ラントスルニタトフル也。一切ノ物、各止ルヘキ處アルコトヲ云也。章句ノ物ノ字、廣ク兼タリ。君臣父子ヨリ、人ノ言行ニ至ルマテ、イツレモ、皆止ルヘキ理リアリ。其カンヨウヲイハ、明德新民也。蒙引曰、維民所_ノ止_ハ之_ハ止_ハ、止_ハ居_ノ之_{ナリ}止_也。物各有_レ所_ニ當_ル止_ハ之_ハ止_ニ至_ニ善_ニ一_{ナリ}之_{ナリ}止_也。借_テ彼_ノ之_ヲ詞_ヲ、寓_ス此_ノ之_ヲ意_ヲ（『大學諺解』）

都は王のある所なれば諸人あつまり来りて居住せんとねかふを至善にと、まるにたとふ（『大學和字抄』）

『大學諺解』の「都ハ、皇居ニテ」より「ニタトフル也」に至る箇所は『大學和字抄』の解説とほぼ一致する。ここは朱熹の「邦畿、王者之都也。止、居也。言物各有所當止之處也」を基調とした解説である。朱熹は『大学或問』において『大学章句』の説明を補足⁽²⁵⁾し、後に『四書大全』及び『四書蒙引』が朱熹の解釈を敷衍⁽²⁶⁾した。

伝三章第一節は「止」字の説明を展開する上での導入部分であり、この伝三章第一節における「止」字は、あくまでも、譬え話の中で用いられたものである。『四書蒙引』は朱熹の意を汲み、「借彼之詞、寓此之意」と明確にその旨を述べた。⁽²⁷⁾

『大學諺解』は説明の中で用いるのみならず、『四書蒙引』を直接に引く。逆に、『大學和字抄』は『四書蒙引』を説明の中で用いるのみであり、直接的には引用を行わない。

しかし、このような態度の違いを持つにもかかわらず、簡潔な解説の中でも、林羅山が朱熹の解釈と朱熹の解釈に対する明代の理解を踏まえ、これらを用いることに注目したい。『大學諺解』と『大學和字抄』は新注を用いて『大学』解釈を展開する。ただし、この新注とは明代の『大学』解釈をも含む。この点で両者は共通する。取り扱う注釈の範囲という点で、素人向けに著された『大學和字抄』が専門家向けに著された『大學諺解』に劣るとは一概には言えない。

5 古注の検討

本節では、『大學諺解』と『大學和字抄』の『大学』伝三章第二節に対応する箇所を比較検討する。『大学』伝三章第二節では、『詩経』小雅「縣蠻」篇から詩句が引用される。「子曰」以下では孔子による詩句の解説が引用され、三綱領の一つである「止至善」の理解が促される。この第二節は、人には止まるべきところがあることを説く第一節と、何に如何にして止まるのかを説く第三節の中間に位置し、人は止まるところを知らなければならぬことを説く箇所である。

緡蠻ヲ、詩ニハ、綿蠻トナス。凡禮記ニ引タ處ノ詩書、其字異同多シ。緡蠻ノミニカキラス。綿蠻ハ、鳥ノ声也。蒙引云、緡・蠻二字、義無レ所取。只是以^テ此^ノ二字、状^カ二黄・鳥^ノ之聲^ニ。如下^シ鵲鳴啁・啁、鶯^ニ曰^フ二鵲・鵲^ノ之類^上○毛萇詩傳云、綿・蠻、小・鳥貌。正義曰、緡・蠻・然而小者、是黄・鳥也。又云、緡・蠻、文連^{ナル}二黄・鳥^ニ。黄・鳥、小・鳥。故知^ニ緡・蠻^ハ小貌^{ナル}。章句ニハ、綿蠻ハ、鳥ノ声ナリト云。傳ニハ、小鳥ノ貌ナリト云、禮記疏ニモ、微小ノ貌トアリ、是両説也。綿蠻黄鳥ト、句ノ首ニアルユヘニ、篇ノ名トスルナリ（『大學諺解』）

緡蠻は黄鳥の聲也（『大學和字抄』）

右は、『大學』伝三章第二節の「詩云、緡蠻黄鳥」及び『大学章句』の「緡、詩作綿○詩、小雅綿蠻之篇。緡蠻、鳥聲」に対する注釈部分からの引用である。

章句は文字の異同に関する問題をまず取り上げる。『大學諺解』はこれに従うが、『大學和字抄』はこの問題を取り扱わない。『大學諺解』の「緡蠻ヲ」より「緡蠻ノミニカキラス」へ至る箇所は、章句の「緡、詩作綿」を承ける。これは『詩經』所収の詩句と『礼記』大学篇所収の詩句との間に、文字の異同があることを指摘しているのである。『詩經』では「綿蠻」に作り、『礼記』では「緡蠻」に作る。朱熹もまた『詩集伝』では「綿蠻」に作るが、『大学章句』においては「緡蠻」と作る。³¹ 林羅山はこれを承け、『大學諺解』と『大學和字抄』において「緡蠻」と作る。

『大學諺解』の「綿蠻ハ」以下と『大學和字抄』の「緡蠻ハ」以下は語義の問題を取り扱う。『大学章句』は「緡蠻」を「鳥聲」とする。朱熹は、鳥の鳴き声を音で表現すると「緡蠻」になるものと理解したのである。『詩集伝』においても、朱熹は「綿蠻」の二字に「鳥聲」という注を加える。³² 林羅山はこれに従い、『大學諺解』では「綿蠻ハ、鳥ノ声也」とし、『大學和字抄』では「緡蠻は黄鳥の聲也」とする。

『大學諺解』はさらに『四書蒙引』からの引用を行う。『四書蒙引』の当該箇所は「緡蠻」の二字を「状黄鳥之聲」と説明する。『四書蒙引』は章句を踏まえ、意味ではなく音が問題であると、補足する。林羅山はこれを、朱熹の解釈を理解する上で助けになると判断したために、引用しているのである。

『大學諺解』は『四書蒙引』からの引用の後に圈を置く。林羅山は圈内に、伝の「詩云、緡蠻黄鳥」及び章句の「緡、詩作綿○詩、小雅綿蠻之篇。緡蠻、鳥聲」への、基本的な理解を示した。

林羅山の解釈が朱熹の理解を基調としつつも、明代の書物をも利用する点は前節で指摘した。問題は、『大學諺解』が古注をも視野に入れて比較検討の対象とする点である。

自らの基本的な理解を提示した後、林羅山は『大學諺解』において古注の検討に移る。まず、林羅山は毛伝から「緡蠻、小鳥貌」と引き、詩における新注に対する古注の理解を示す。毛伝は「緡蠻」の二字を鳥の容貌を表す言葉として理解する。さらに、林羅山は孔穎達の疏を重ねて引用して、「緡蠻」の意味合いを限定しようと試みる。これにより、『大學諺解』を読む者は、詩で扱われる「黄鳥」の姿がただの小さな鳥から文采ある美しい鳥へと変わる過程を追うことが出来る。この上になお、林羅山は『礼記』所収の大学篇をも組上へ載せる。孔穎達の疏には、「詩云、緡蠻黄鳥、止于丘隅者、此詩、小雅緡蠻之篇、刺幽王之詩。言緡蠻然微小之黄鳥、止在於岑蔚丘隅之處、得其所止、以言微小之臣、依託大臣、亦得其所也」とある。林羅山はこれを踏まえ、「禮記疏ニモ、微小ノ貌トアリ」と言及する。

古注を検討した上で、林羅山は「是両説也」と言う。林羅山は、まず「緡蠻」の二字を鳥の鳴き声と取る章句を掲げ、これを『四書蒙引』によって補足した。次に、林羅山は圏外において古注を重ねて引用し、字義を限定し理解を具体的に行く過程を示した。

最終的に新注に拠る点では、『大學諺解』も『大學和字抄』も同様である。ただ、『大學諺解』が古注を検討しているに對し、『大學和字抄』はこれを行わない。

6 解説の繁簡

『大學諺解』は結論に至る過程を示し、『大學和字抄』は結論のみを述べる。次に、この差異がより明確に現われるケースを検討したい。『大學諺解』と『大學和字抄』の『大学』伝十章第十六節に対応する箇所を比較検討する。

見賢而不能_レ舉_{クル}、舉而不能_レ先_{ルハ}、命也。見不善而不能_レ退_{ハクル}、退而不能_レ遠_{ルハ}、遠、去聲○若_キ此者、知所_二愛_{スル}、惡_{スル}矣。而未_レ能_レ盡_ニ愛_ヲ命鄭氏云、當作_レ慢。程子云、當作_レ怠。未詳孰_一是。遠、去聲○若_キ此者、知所_二愛_{スル}、惡_{スル}矣。而未_レ能_レ盡_ニ愛_ヲ、惡_{スル}之道_一。蓋君_一子而未_レ仁_{ナリ}者也（『大學諺解』）

見賢而不能_レ拳々而不能_レ先命也見不善而不能_レ退々而不能_レ遠過也（『大學和字抄』）

伝十章第十六節には字義の説明に関する問題がある。この問題について、『大學諺解』と『大學和字抄』の対応の違いを窺いたい。

或問云、命之_二為_{タル}慢_一、與_二其_ノ為_{タル}怠_一也、孰_一得_{タル}。曰、大_一凡_ニ疑_ハ、義_ハ所_二以_{スル}決_一之_ヲ、不_レ過_ニ乎_一義、理、文、勢、事、證、三者_ニ而_レ已_ミ。今此_二字_一、欲_下以_ニ義_一、理、文、勢_一決_上之_ヲ、則_レ皆_ス通_ス、欲_下以_ニ事_一證_一決_上之_ヲ、則_レ無_シ考_{フル}、蓋_シ不_レ可_ラ以_テ深_ク求_ム矣、云云

命ト慢ト、音相近キ故ニ、アヤマレリ。慢ハ、ヲコタルトヨメリ。カロシユルカセニスル義ナリ。程子ハ、怠ノ字トナスヘシト云リ。此モタユミヲコタルナリ。二字ノウチ、何レニテモ、一決スヘキヲ、章句ニ未詳孰_一是ト云ヘルハ、意

ナキニアラス。ホシヒマ、ニアラタメサルハ、闕疑ノ法ナリ。兩字ノウチ、イツレニテモ、クルシカラサル故ニ、兩説ヲ存セリ。凡ソ朱子ノ章句集註ノウチニ、未詳孰是トアルコロ、ヲロソカニ見ルヘカラス。皆イハレアルコトナリ
（『大学諺解』）

命は慢の字のあやまり也おこたるとよめり（『大學和字抄』）

この箇所には「命」字を「慢」字に取る説と「怠」字に取る説があり、いずれも「命」字に作ることを誤りとする。この誤りの原因を、前者は字音の問題に帰し、後者は字面の問題に帰す。朱熹は『大学章句』において両者を挙げつつも態度を保留し、『大学或問』で再び言及する³⁴。

朱熹はこの問題を「義理」「文勢」「事證」の三点から論じるが、さらなる追求を不可能とする。『大學諺解』所引『大学或問』の「今此二字」以下にある通り、「慢」字と「怠」字のいずれを取ろうとも差し支えはないが、根拠を欠く。だからこそ、朱熹は強引に結論を導こうとはしない。『大学或問』において、朱熹は『大学章句』で「未詳孰是」とした理由を丁寧に説明したことになる。

『大學諺解』において、林羅山は朱熹の態度を「闕疑ノ法」と評価する。鄭玄の説と程子の説を紹介した上で、林羅山は「慢」字と「怠」字の両者に「ヲコタル」という和訓を当てる。伝の本文についても、林羅山は「命」字に「ヲコタルナリ」という添え仮名を付す。『大学或問』を用いて朱熹が『大学章句』において「未詳孰是」とした理由を述べ、その上で、林羅山は「皆イハレアルコトナリ」とする。『大學諺解』において、林羅山は朱熹の慎重な態度を尊重し、その意を汲んでみせる。

これに対して、『大學和字抄』は「命は慢の字のあやまり也」とする。『大學和字抄』は全く鄭玄の説に拠り、必ずしも細

かく専門的な議論にわたらない解説を行う。『大學諺解』と『大學和字抄』は、基本的には、共に新注に拠るものであった。しかし、『大學諺解』は古注を検討の俎上に載せた。また、『大學和字抄』は、朱熹が鄭玄の説と程子の説のいずれを取るか明言しなかった箇所において、鄭玄の説を取った。林羅山は古注を全く捨て去りはしなかった。また、これを用いることもあったのである。ただここで最も重要なのは、諺解の詳繁・和字抄の簡、という解説の差異である。学問上の態度にまで詳細に言及する諺解と結論のみを簡便に提示する和字抄の違いは、この例から十分に見てとれるであろう。

7 人倫を説く

前項の例から分かる通り、林羅山も古注を用いた。ただ『大學諺解』と『大學和字抄』では、古注への態度に関して、差異が存在する。本説では、この差異がさらに明確な形で観察し得るケースを求め、比較検討を続けたい。

詩云、桃之夭^ニ夭^ノ、其葉蓁^ノ蓁^{ケリ}。蓁^ノ蓁^ノ之^{コノ}于^{ロコ}于^ニ歸^{トク}、宜^シ其家^ノ人^ニ。宜^フ其家^ノ人^ニ而^メ后^ニ可^シ以^テ教^フ國^ノ人^ニ。
 夭^ノ、平聲。蓁音臻。○詩周南桃夭之篇。夭^ハ夭^ハ、少^{ワカク}好貌。蓁^ハ々^ハ、美盛貌。興^{ナリ}也。之^ノ子^ハ、猶言^カ是子^ト。此指^ハレ三女^ニ、子之嫁^ツ者^ヲ而言^フ也。婦人謂^テ嫁^ツ曰^ク歸^ト。宜^ハ猶^レ善^ノ也（『大學諺解』）

詩云桃之夭々其葉蓁々之子于歸宜其家人宜其家人而后可以教國人（『大學和字抄』）

右は、『大學諺解』及び『大學和字抄』の『大学章句』伝九章第六節に対応する箇所からの引用である。『大学章句』伝九章は齊家治国を説く箇所であり、第六節では『詩経』国風周南の「桃夭」篇を引く。

夭夭ハ、ワカヤカニウツクシキ貌ナリ、桃樹ヲサスナリ。花ヲサシテイフハ非ナリ。此詩ノ上ノ章ニ、桃之夭夭、灼灼其華トアレハ、夭夭ハ、桃身ヲ指テ云、花ヲイフニ非ス○婦人謂嫁曰帰ハ、春秋傳ノ語ナリ。詩傳ニモ、コレヲ引ナリ。婦人ハ夫ノ家ヲ家トスルユヘニ、夫ニユクヲ帰トイフナリ。コノ詩、六義ニオイテ、興ノ詩ナリ

此段、詩ヲ引テ云、桃ノ夭夭トワカヤカナル、ソノ葉ノ蓁蓁トサカンナルヲミレハ、男女嫁娶ノ時節ナリト興シテ、コノ女子コ、ニトツク、必ソノ家人ニヨロシカルヘシ、ソノ家人ニ、ヨロシフシテ、以テ国人ヲ教フヘシ。コ、ニ宜其家人トカサ子テ云、上ノ宜其家人ハ、女子ヲ指シテ云、下ノ宜其家人ハ、國ヲ治ル人ヲ指シテ云ナリ。家ト、ノホリテ後ニ、國治ル義ナリ（『大學諺解』）

夭々はわかくかはよきかたち也蓁々はうるはしくさかなるかたちなり桃のうつくしきを見て興して爰に女子の嫁するあり夫の家に行て妻となりて其家に宜しかるへしと云詩の意也夫婦の道宜き時は其家治る（『大學和字抄』）

『大學諺解』は先に語義の解説を行う。桃夭篇の夭夭とは桃の樹全体を指して言い、桃の花を指す訳ではない。林羅山はこの旨を「夭夭ハ、桃身ヲ指テ云」と簡潔に述べる。これは『四書蒙引』に拠る³⁵。

続いて、『大學諺解』には圈が置かれ、「歸」字の訓詁が問題となる。林羅山が「婦人謂嫁曰帰ハ、春秋傳ノ語ナリ。詩傳ニモ、コレヲ引ナリ」と指摘する通り、「婦人謂嫁曰帰」は『詩集伝』の桃夭篇に見え、古くは『春秋公羊伝』や『春秋穀梁伝』の隠公二年に記述が見える³⁷。

この後に、『大學諺解』は段落を変えて第六節を訳してみせる。併せて「宜其家」という表現が二回続く点に触れる。これによれば、最初の「宜其家」は主語が「女子」であり、二度目の主語は「國ヲ治ル人」である。

この第六節では、『大學諺解』は古注と新注を比較しないが、細かな問題についての注意点を述べる。

一方、『大學和字抄』は「夭々はわかくかはよきかたち也」や「爰に女子の嫁するあり」とする。これも「夭夭、少好貌」や「婦人謂嫁曰婦」という朱熹章句を踏まえる。

○人倫ノ内、貴キハ君父也トイヘトモ（男女アリテ後、父子アリ、君臣アレハ、男女ヲ人倫ノ本トス。）ソノウヘ室家
 閨門ノ内、心安ク思テ、ユタンスル時ハ、政乱テ家ト、ノホラス。愛ニオホレテ、妾ヲ以テ妻トシ、嫡子ヲステ、庶
 子ヲ立テ、或ハ婦姑勃籜シ、或ハ夫妻^{ソハム}厩^レ目、如何ソ家ヲト、ノヘンヤ。故ニ、易ハ、乾坤ニ始リ、詩ハ関雎ニ始リ、
 礼ハ昏義ヲシルシ、書ハ釐降ヲ載ス。皆コノ教ヘヲ示セリ。毛傳曰、夫婦^{ルトキハ}有^レ別、則父・子親。父・子^{ムトキハ}親、則君・臣
 敬。君臣^{スルトキハ}敬、則朝廷正。朝廷^{タヘシ}正、則王・化^{シトキハ}成ルトアリ、是関雎ノ義ナリ（『大学諺解』）

夫婦ありて父子あり故に男女は人倫の本也此道正しければ一国の夫婦の法の教となりて乱る、事なし君主につひていは、夫婦正しければ父子したしむ父子したしければ君臣に礼あり君臣に礼あれば朝廷正し朝廷正しければ国も天下も治るなり（『大學和字抄』）

山括弧内に示したのは行間の書き込みである。『大學諺解』は圈を置き、その後には『易経』序卦伝の下篇⁽³⁸⁾を踏まえ、あるべき社会秩序を説く。この社会秩序において、林羅山は君臣関係と父子関係を最も重要なものとして位置付ける一方、男女（夫婦）関係を君臣関係と父子関係を乱す原因とみなす。『易経』からの引用の後、『莊子』などから引用を行いつつ、警戒すべき事例を挙げる。さらに、林羅山は経書を根拠にして、自らの主張を正当化する。「易」が乾卦と坤卦を首とし、「詩」が関雎の詩より始まり、「礼」は昏儀を記し、「書」は堯典の末に娥皇と女英が舜へ嫁した逸話を載せる。林羅山は夫婦関係を人倫の基本とした経書を列挙し、最後に「関雎」篇第一章第一句に附された毛伝で締めくくる。⁽⁴¹⁾

『大學諺解』の当該箇所において、林羅山は古注を用いて人倫の問題に言及する。このような議論は『大学章句』や『大学或問』あるいは、『大學諺解』で用いられる明代の諸書では行われない。一条兼良や清原宣賢の『大学』注釈書でも同様である。ただ藤原惺窩のみが、『大学』の当該箇所において、『大學諺解』とよく似た論調で人倫について論じる⁽⁴⁾。

すでに検討した伝三章においては、林羅山は新注に拠ることを前提とした上で古注をも参照するという方針を採った。しかし、ここでは古注に重点を置いて議論が展開する。

『大學諺解』は圈を置いた上でこの問題について論じている。大学八条目における「齐家」理解の基本として、この議論も「大学」を読む上で心得ておくべき予備知識として言及されたものと理解出来る。しかし、『大學和字抄』の場合はそうとは言えない。

『大學和字抄』の「夫婦ありて父子あり」より「乱るゝ事なし」に至る箇所は序卦伝に拠る。また、「夫婦正しければ」より「天下も治るなり」に至る箇所は、字句を改変している部分もあるが、毛伝を踏襲している。『大學和字抄』には、『大學諺解』の人倫に関する議論が省略して記されている。

この議論が「夫婦の道宜き時は其家治る」という伝九章第六節の内容を総括した句から途切れずに続くのである。この点に「君主につひていはゝ」という文言と徳川將軍家へ献上するために著された『大學和字抄』の性格を加味すると、この部分も本文の一部と見なさねばならない。つまり、『大學諺解』の場合のような専門家が踏まえておくべき予備知識としてではなく、『大學和字抄』は『大学章句』の解説の一部分として古注を用いるのである。

比較検討の結果、『大學諺解』と『大學和字抄』は共に古注を利用しており、特に『大學和字抄』は章句の解説内容に直結する形で古注を利用して人倫の問題に言及していることが明らかとなった。他にもこのような事例は存在するのであろうか。最後に、「大学」経の止至善に関する箇所を材料として比較検討を行う。

大學之道、在^レ明^ニ・德^ヲ、在^レ親^ニ・民^ヲ、在^レ止^ニ於至善^ニ（『大学諺解』）

大学之道在明明德在親民在止於至善（『大學和字抄』）

右は『大學諺解』と『大學和字抄』の「大学」経本文である。繰り返し述べた通り、『大學諺解』は本文が加添されており、また、朱熹章句が附される。

止^{トハ}者、必^テ至^ニ於^ニ是^ニ而^レ不^レ遷^ニ之意。至^ハ・善^ハ、則^ル事理當^レ然^ニ之極也。言^ハ明^ニ・明^ヲ德^ヲ、新^{スル}民^ヲ、皆^ニ當^ニ下^ニ止^ニ於^ニ至^ニ・善^ニ之地^ニ而^レ不^レ遷^ニ。蓋^シ必^シ其^レ有^ニ以^ニ盡^ニ夫^ノ天^ノ・理^ノ之極^ヲ、而^レ無^ニ一^ニ・毫^ノ人^ノ・欲^ノ之私^シ也。此^ノ三^ノ者^ハ、大^ノ・學^ノ之綱^ヲ・領^{ナリ}也（『大学諺解』）

右は『大學諺解』に附された朱熹章句である。当該箇所は長く、それに対応して『大學諺解』と『大學和字抄』の解説も長大となる。したがって、本稿では論旨に関わる箇所のみを引用するに留める。

止トハ、コ、ニ至テ、ウツラサルノ意ナリ。至善ハ、事物ノコトハリノツカラシカルベキトコロノ至極ナリ。総ノ理ハ善ナリ。毛从ハカリモ悪ナシ。故ニ理ヲ名ツケテ、至善トス。善ノ至ハ、即理ノ極所也。オノレカ明德ヲ明カニスルモ、民ヲアラタニスルモ、皆至善ノ極所ニ止テ、ウツルヘカラス。徳ヲ明カニスルモ、十分ノ道理ヲ盡スヲ、至善ニ止ルト云ナリ。コ、ニ至テ、オノツカラ過不及ノタカヒナシ。カクノコトクナレハ、必ス天理ノ至極ヲ盡メ、一毫人欲ノ私ナキナリ。此至善ハ、即チ中庸ノ中ナリ。呉季子曰、至・精至・當、盡^シ善盡^ス美之域、毫・髮^{モル}不^レ可^ニ得^テ而^レ加^フ者、聖・門无^シ以^ニ形^{スル}・二^ヲ容^フ之^ヲ。姑^シ強^ニ名^ヲ曰^フ至・善^ト（『大学諺解』）

明德を明にするも民を新にするもおのつからさたまれる道理あるを至善と云也およそ理と云ものは至極の善にてけのはしはかりもあしき事なし、かるかゆへに理の異名を至善と云也義理の微妙にはなはたふかきはめは名つけていひかたき事なるほとにしはらく至善と云名を立て人にしめすなり君としては仁にと、まり臣としては敬にと、まり王としては孝にと、まり父としては慈にと、まり朋友としては信にと、まり兄弟としては友情にと、まり夫婦としては和順にと、まるかなとやうのたくひを至善にと、まるとは云也止と云はこ、にいたりてうつらさる義也(『大學和字抄』)

右は当該箇所に対する『大學諺解』と『大學和字抄』の解説である。『大學諺解』と『大學和字抄』が朱熹の章句に拠りつつも、『四書大全』を利用している点は共通する。しかし、『大學和字抄』が人倫の問題に言及する点は、『大學諺解』と異なる。『大學和字抄』において、林羅山は経と伝の関係を踏まえ、伝の内容と関連付けて解説を行う。林羅山がここで人倫の問題に言及するのは、「止至善」を扱う伝三章と経を関連付けるためである。右で引用した『大學和字抄』の解説と関係があるのは、伝三章第三節である。

また『大学』伝三章第三節では、『詩経』大雅「文王」篇から詩句が引用される。「為人君止於仁」以下では、引用した詩句の解説という体で、三綱領の一つである「止至善」の「止」字の内容が説かれる。この第三節は、人には止まるべきところがあることを説く第一節、人は止まるところを知らなければならぬことを説く第二節を承け、何に如何にして止まるのかを説く箇所である。ここでは便宜上『大學和字抄』を先に引用する。

文王の政は民飢寒の憂なし是君として仁に止なり殷の紂につかへて礼をうしなはす是臣として敬に止る也文王の父を王季と云それにつかへて能やしなふこれ子として孝に止る也武王周公は文王の子也是をよくなしへて父子兄弟皆聖人也是父として慈に止る也文王国をおさめ位にありし時太公望伯夷叔齊等來りしたかひ虞芮の訴もやむ是国人と交る時信に止

る也人倫におゐては君臣父子國人これその大なるものなり事におひて仁敬孝慈信はその大なるもの也其至徳にいたるを止ると云なり（『大學和字抄』）

引此而言、聖人之止、無非至善トハ、文王ノ詩ヲ引テ云、聖人ノ止ルトコロ、コトクク至善ニム、ヨク知り、ヨク得ルナリ。オノツカラヨク止ルユヘニ、安所止ト云ナリ。文王ハ聖人ナリ、故ニ章句ニ、聖人之止ト云テ、文王之止トイハス○五者、乃其目之大者也トハ、止仁止、敬止、孝止、慈、止信、合テ五ツナリ。人倫ニオイテハ、君、臣、父、子、國人、コレソノ大ナルモノナリ。事ニオイテハ、仁、敬、孝、慈、信、コレソノ大ナルモノナリ。目ハ、條件ナリ、事物ノ條目ヲ云ナリ。皆是其止ル所ノ大ナルモノナリ

究其精微之蘊トハ、眞西山曰、理之淺・近處、易見、而精・微處難知、若只得其皮・膚、便以未善、爲已善一、須窮至精・微處。東陽許氏曰、精是明・白之至・理、指五・事而言、微是五事中纖悉之事、及毎事之間、曲・折隱・微處。イフ意ハ、仁ヲシ、敬ヲラストモ、一二分ノ者アリ、三四分、五六分ノモノアリ、コレヲハ、タ、仁ト云ヘシ、敬ト云ヘシ。仁ニ止リ、敬ニ止ルト云ヘカラス。十分ノ仁ヲシ、十分ノ敬ヲスルヲ、仁ニ止リ、敬ニ止ルト云ヘシ、コレ至善ノ仁敬ナリ。若シカスンハ、善トハ云ヘシ、至善トハイヒカタシ。孝、慈、信、モ、又シカリ。又仁ハ、人ヲ愛ストハカリシリ、敬ハ人ヲウヤマフトハカリシルハ、精微ニアラス。人ヲ愛スルウチニモ、人ヲ敬スルウチニモ、淺深アリ、厚薄アリ、精粗アリ。人人タレモシヤスキハ、淺シ、アラシ、其深ククワシク微妙ノ蘊奧ハ、人人ノシリカタキトコロナリ。學者コ、ニオイテ、其深キ蘊奧ヲ窮メヨト云ナリ、又類ヲ推テ、其餘ヲ盡ストハ、コ、ニ、君仁、臣敬、子孝、父慈、國人信トアリ。此例ヲ以テイハ、其餘ニ、夫婦兄弟アリ。夫止於義、婦止於順、兄止於友、弟止於恭トイフヘキ類ヒナリ。又天下ノ萬物萬事ヲ、推テ見レハ、各至善ノ在トコロアリ、コレヲシリテ、止ルトキハ、何ノウタカヒカアランヤ○新安陳氏曰、學者於此以下、乃朱子推廣傳・文言・外之

意^ヲ（『大學諺解』）

伝の「為人君止於仁、為人臣止於敬、為人子止於孝、為人父止於慈、与國人交止於信」と章句の「引此而言、聖人之止、無非至善。五者、乃其目之大者也。學者於此、究其精微之蘊、而又推類以盡其餘、則於天下之事、皆有以知其所止、而無疑矣」に対応する箇所からの引用である。

伝は、詩に見える「止」字を承け、止まるべきところを人倫という点から分類し、さらにそれぞれに関係する徳目を列挙している。章句によれば、伝が挙げた五つの徳目こそが至善の条目なのである。ただし、伝はあくまで「凡例」を挙げたに過ぎず、「類を推して以て之に通」しなければならぬのである。章句の「究其精微之蘊」以下は、この点を問題としている。また、伝が挙げる人倫についても、君臣父子朋友を挙げるのみであり、夫婦兄弟に関する記述を欠く。つまり、五倫のうち二つまでを欠くため、朱熹は『大学或問』で補足⁽⁴³⁾した。

林羅山はこれを踏まえ、伝に欠けていた夫婦兄弟の記述を補った。『大學和字抄』において、林羅山は『尚書』の孔安国伝に見える「父義、母慈、兄友、弟恭、子孝」という記述を利用し、経を解説したのである。この古注による経への補足は『大學和字抄』にのみ存し、詳細を極める『大學諺解』には観察し得ない。

8 おわりに

最後に、『大學諺解』と『大學和字抄』の両者の関係を整理し、比較検討の結果に考察を加えたい。

まず、両者の前提となった林羅山の知識に関して言えば、『大學諺解』において林羅山は、彼が実見した明代の書籍をも用いて『大学』を解釈した。繁簡の差こそあれ、この点では『大學和字抄』も同様である。本稿で言及し得た明代の書籍は

僅かに『四書大全』と『四書蒙引』のみであったが、林羅山が用いた膨大な船載書の一端には触れた。林羅山の学術が溢れんばかりの知識を背景とすることは間違いない。また、その知識の中には明代あるいは宋代以前の知識をも含むことも確認した。特に、この特徴は『大學諺解』に顕著に現れる。

次に、注釈態度、特に古注・新注の關係について言えば、林羅山は、古注と新注を混じえる清原家の四書解釈へ批判を行ういつつも、自らは決して古注を切り捨てなかった。むしろ、林羅山は古注を比較検討の対象として、古注への理解を前提とした上で、あえて新注による解釈を選んだのである。林羅山は清原家のテキストを用いて経書を読み、後に清原家への批判を展開した。したがって、林羅山の学習階梯という点から見ても、清原家への対抗心という点から見ても、古注を検討の俎上に載せることは必然的な結果といえる。

さらに、執筆背景や叙述の特徴について言えば、『大學諺解』は特殊な経緯のもとで成立した。若い君主の下で開けつつある自身の未来への展望と、その後を託すべき後継者の夭折とが、同時にのしかかって来る状況。これが『大學諺解』という著述の性格を決定づけている。『大學諺解』は後継者養成のために著されたのである。そのため、林羅山は幅広い知識を駆使し、自身の『大学』解釈を展開した。『大學諺解』の特徴は、博と繁である。

一方で、『大學和字抄』は『大學諺解』と全く異なる特徴を示す。『大學和字抄』は『四書大全』や『四書蒙引』を用いる頻度が少なく、古注と新注を比較検討することもない。また、依拠する資料を原文で引用せず、常に簡潔に自己の解釈を述べる。朱熹が込み入った議論を展開する箇所については、『大學和字抄』はこれを避け、必ずしも従わない。『大學和字抄』は専門的な議論にはわたらない方法により、『大学』解釈を展開する。つまり、『大學和字抄』の特徴は、要と簡である。

既に確認した通り、『大學和字抄』は徳川将軍家に三度にわたって献上された書物である。この書を献上するにあたり、林羅山が素人相手の仕事であることを理由にいい加減な態度で臨んだとは考え難い。また、本稿で扱った『大學和字抄』が『大學諺解』よりも後に書かれたことを忘れてはなるまい。

つまり、本稿で指摘した『大學諺解』と『大學和字抄』の違いを、想定する読者の違いや林羅山の学術上の進展によるレベルの高低ではなく、林羅山という一人の人間が有する異なる側面の表れとして理解せねばならない。一つは後継者育成のため、一つは林羅山の渡世、すなわち徳川將軍家に仕えるという稼業の一部という、二つの側面である。

著作として単純に比較してしまえば、『大學和字抄』は一見『大學諺解』に劣るように見える。しかし、著述の背景の中にそれらを位置づける時、単純に『大學和字抄』と『大學諺解』に優劣をつけることは出来まい。博識を競うならば、清原家の学術もまた人後に落ちぬことは前稿で確認した通りである。

最後に、『大学』に注をつけるという行為そのものの持つ意味について言えば、自身の学を次代に伝える必要性を強く意識した時、林羅山は『大学』の注釈書を著した。また、『大学』の注釈書は徳川將軍家に再三にわたり献上された。これは、林羅山のみならず幕府高官から、『大学』という書物が尊重されたことを示す。『大学』とは、『礼記』の「大学」篇ではなく、四書の一つとしての『大学』である。とすれば、注釈書の中で展開される解説も、朱熹の解釈を基調としつつ明代の書物を利用するものであったのも当然である。朱熹の没後も彼のフォロワーたちが様々な意見を述べた。朱熹の四〇〇年近く後に生まれた林羅山がそれを活用しないと考えるのは不自然である。実際には、林羅山はそれをよく用いたのである。

とすれば、林羅山は明確な意識のもとで、新注に拠った注釈書を著したと言わなければなるまい。また、その注釈書には為政者への教訓が含まれていた。つまり、津田左右吉がかつて述べたように、確かに儒教による為政者への「多少の感化」があった、あるいは期待されていたことはまぎれもない事実なのである。

注

- (1) 「慶長八年征夷大將軍と爲りし家康は、十年羅山林又三郎信勝を二条城に召見し、尋ぎて命じて祝髪せしめ以て儒臣と爲せり。是れ徳川氏が學者を擢用せし始にして、程朱學の幕府に行はれし濫觴なり」、「寛永十一年朝鮮信使來朝の時、幕府羅山に命じて筆語問答せしめ、返簡をも草せしめたる、是れ實に武家外交に儒臣を用ひし始めにして、亦儒釋分立の端たり」、「上の好む所下之より甚しき者あり。家康の學を好みて儒を尊ぶや、當時の侯伯、靡然として文學に嚮ひ（中略）其の他惺羅の子弟、各藩に分布して、文教の興隆に任ぜり」（西村天囚『日本宋學史』、杉本梁江堂、一九〇九）
- (2) 「武士の思想の基礎になつてゐる所謂忠孝に於てすら、それを兎も角も維持していつたのは、主従関係と世祿制とが根本になつてゐる社会組織と、それから生まれた社会的風尚との力であつて、儒教の如きは纔かに文字上の知識によつてそれを助けたに過ぎなからう。儒者の政治学を中心である仁政論に於ても、また同様であるが、たゞこれは、百姓は（武士の生活を維持するために）入用のものであるから大切にしなければならぬといふ思想が、考のある国主の心得たるのみであつて（中略）従つて此の点に於ては、儒教が多少の感化を所謂學問をした諸大名の民政に及ぼしたこともあるう」、「勿論かういふ特殊の知識は国民の実生活とは関係の少ないものであるから、一般社会はそんなものには支配せられず（後略）」（津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』、洛陽堂、一九一七）
- (3) 「羅山における自然法の窮極の意味が現実の封建的ヒエラルヒーをまさに「自然的秩序」として承認することにあるのは当然であらう」（丸山眞男『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、一九五二）
- (4) 「儒学が外来思想であつたことの正当な認識に立戻る必要があるのではないか」、「要するに羅山や惺窩が家康のもとで与えられた地位は、承兌や元佶らのそれと大差のないものであつた。そして家康が承兌や元佶を側近においた目的は何であつたかといえば、文筆の能力を必要とするような政治上の事務に当らせることであつて、寺社行政、外交文書の解説と作成、法案の起草などがその主たるものであり、かねて古書の蒐集や出版、学問文芸の講釈などにも従事させてあるが、それも政治上の参考ならびに為政者の個人的教養にそなえるためであつた。このような方面に学識ある僧侶を利用することは、周知のごとく室町幕府いらいの伝統であつて、秀吉のときにも承兌や玄圃靈三らを用いていた。家康の学者登用は、つまりこの伝統を襲つたものにすぎなかつたのである」（尾藤正英『日本封建思想史研究』、青木書店、一九六一）
- (5) 「徳川時代の前期、少なくとも綱吉の頃まで、宋学が、学問としてにしろ、政治と倫理に関わる教義教説としてにしろ、また物の考え方としてにしろ、広く普及し受容されていたなどと解することは、表見的相対的「盛行」にかかわらず、できないと結論することは許されよう」（渡辺浩『近世日本社会と宋学』、東京大学出版会、一九八五）
- (6) 村上雅孝「林羅山『大学諺解』をめぐる諸問題——近世の漢文訓読史の立場から——」（『歴史と文化』、岩手大学人文社会科学部、一九八一・〇二）
- (7) 大島晃「林羅山の『大学諺解』について——その述作の方法と姿勢」（『漢文学解釈与研究』七、漢文学研究会、二〇〇四・一二）
- (8) 「古典を読むという行為の一展開——抄物と諺解の比較検討を通じて——」（『日本漢文学研究』一〇、二〇一五・〇三）

- (9) 函館市立中央図書館も『大學章句解』として一本を有するが、完本ではない。村上・大島の両名は内閣文庫所蔵本を用いており、本稿もこれに従う。
- (10) 本稿では内閣文庫所蔵の『大學諺解』を用いる。
- (11) 八歳（元和六年）で四書を、十歳（元和八年）で五経を読んだという林左門は、十七歳（寛永六年）の頃には林羅山に代わって塾生に『孟子』を講じるようになっていた。この講義を聞いた羅山は、この子さえいれば自分は死んでも悔いはない、と思ったという。
- (12) 『礼記』・檀弓上
- (13) 「讀耕林子年譜」（内閣文庫所蔵林鷺峯旧蔵本）、「西風淚露」（内閣文庫所蔵『鷺峯林學士全集』卷第七七）、「自叙譜略」（内閣文庫所蔵『鷺峯林學士全集』附録）
- (14) 内閣文庫所蔵『鷺峯林學士全集』所収。
- (15) 林鷺峯「自叙譜略」（内閣文庫所蔵『鷺峯林學士全集』附録）
- (16) 『大學和字抄』は、その書名が「羅山年譜」に見えることもあり、様々な書籍で言及されるものの、詳しくこれを扱う論文は存在しない。福井氏の『江戸幕府編纂物』（雄松堂出版、一九八三）は『大學和字抄』を献上本の一つに数え、その成立経緯にまで言及した唯一の例である。
- (17) 本稿では肥前島原図書館松平文庫所蔵の『大學和字抄』を用いる。
- (18) 権力者に経書を献上する行為は、古くは何晏『論語集解』の例がある。
- (19) 「書新雕延喜式後」（内閣文庫所蔵林鷺峯旧蔵本『延喜式』）
- (20) 「羅山年譜」（内閣文庫所蔵『林羅山文集』附録卷第二）
- (21) 「言物各有所當止之處也」（内閣文庫所蔵『大學諺解』所引『大學章句』伝三章）
- (22) 「言人當知所當止之處也」（内閣文庫所蔵『大學諺解』所引『大學章句』伝三章）
- (23) 林羅山の後を継いだ林鷺峯は、『大學諺解』を補佐するものとして、『大學或問私考』を著した。この林鷺峯晩年の作品は『大學或問』本文をしばしば割愛する。『論語諺解』や『大學或問私考』が払うべき注意を怠ったわけではなく、『大學諺解』の態度が執拗なのである。
- (24) 『巨言抄』や『三徳抄』あるいは『経書要語』なども、引用された古典籍の本文は加點されている。ただし、内閣文庫所蔵の『経書要語解』は、引用された経書の本文が加點されていない。
- (25) 「或問、此引玄鳥之詩、何也。曰、此以民之止於邦畿、而明物之各有所止也」（『大學或問』）
- (26) 「王者所居、地方千里、謂之王畿。居天下之中、四方之人、環視内向、皆欲歸止於其地、猶事有至善之理、人當止之也。」（『四書大全』）
- (27) 「維民所止之止、止居之止也。物各有所當止之止、止至善之止也。借彼之詞、寓此之意」（内閣文庫所蔵林羅山旧蔵本『四書蒙引』卷第二）
- (28) 「縣蠻黃鳥止于丘隅」（『毛詩』小雅・縣蠻）

- (29) 「詩云緝蠻黃鳥止于丘隅」(『礼記』大学)
- (30) 「緝蠻黃鳥止于丘隅」(『詩集伝』小雅・緝蠻)
- (31) 「詩云、緝蠻黃鳥、止于丘隅」(内閣文庫所蔵『大學諺解』所引『大学章句』伝三章)
- (32) 「緝蠻、鳥聲」(『詩集伝』小雅・緝蠻)
- (33) 「正義曰、言緝蠻然而小者、是黃鳥也」(『正義曰、緝蠻、文連黃鳥。黃鳥、小鳥。故知緝蠻小貌』(『礼記正義』大学・孔穎達疏))
- (34) 「日、命之爲慢與其爲怠也孰得。日、大凡疑義、所以決之不過乎義理・文勢・事證三者而已。今此二字、欲以義理文勢決之、則皆通。欲以事證決之、則無考。蓋不可以深求矣」(『大学或問』)
- (35) 「或以天天、少好貌、為指桃花、非也。詩上章有云、桃之夭夭、灼灼其華、則知桃只是桃身也」(内閣文庫所蔵林羅山旧蔵本『四書蒙引』卷第二)
- (36) 「婦人謂嫁曰歸」(『詩集伝』国風・周南・桃夭)
- (37) 「冬十月、伯姬歸于紀伯。姬者何。内女也。其言歸何。婦人謂嫁曰歸」(『春秋公羊伝』隱公二年・十月)「冬十月、伯姬歸于紀。禮、婦人謂嫁曰歸、反曰來歸」(『春秋穀梁伝』・隱公二年・十月)
- (38) 「有天地然後有萬物。有萬物然後有男女。有男女然後有夫婦。有夫婦然後有父子。有父子然後有君臣。有君臣然後有上下。有上下然後禮儀有所錯。夫婦之道不可以不久也。故受之以恆。恆者久也」(『易経』序卦伝下)
- (39) 「室無空虛、則婦姑勃谿。心無天遊、則六鑿相攘」(『莊子』外篇・外物)
- (40) 「礼記」は昏義篇を備え、また「儀礼」は士冠礼に次いで士昏礼を記す。
- (41) 「夫婦有別、則父子親。父子親則君臣敬。君臣敬則朝廷正。朝廷正則王化成」(『毛詩』周南・關雎・毛伝)
- (42) 「此治國ノ章ニ婦人女子ノ事ヲ引用ユルハ何ソ云フニ五倫ノ次第ヲ論スルニ或ハ君臣ヲ先ジ或父子或長幼朋友ナリ然ルニ夫婦ヲ以テ先スルハ夫婦和スレハ一家和シ齊テ人倫正メ一國ニ及ブゾ詩関雎篇易咸恒書ノ釐降ヲ見テ其實可知而已人ノ甚タコ、ロヤスクテヲコタリヤスクユタンシヤスキハ夫婦居室ノ間ニアリ人倫ノ大ナル敬ミ処ヲ天下ノ大乱モ此ノ乱レヨリ出来スルゾ豈可忽哉」(内閣文庫所蔵林羅山旧蔵本『大学要略』下)
- (43) 「其於大倫之目猶且闕其二焉」(『大学或問』)

【キーワード】

・日本漢学 ・ 林羅山 ・ 朱子学 ・ 大学 ・ 注釈